

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行  
第4回業務推進全体会合  
議事録

日時：平成27年3月13日（金） 13：00～15：00

場所：TKP スター会議室根津

出席者：14名（順不同・敬称略）

木村<sub>浩</sub>（PONPO）、植木（元気ネット）、神崎（PONPO）、鬼沢（元気ネット）、  
木村<sub>謙</sub>（東大）、久保（PONPO）、佐田（JAEA）、篠田（若狭湾エネ研）、竹中（PONPO）、  
土田（関西大）、中岡（元気ネット）、丸山（PONPO）、諸葛（PONPO）、前参加者

配布資料

4-0. 議事次第

4-1. 第3回業務推進全体会合議事録案

4-2. シンポジウム配布資料（プロジェクトの目的・手法・枠組み）

4-3. シンポジウム配布資料（市民と専門家の意識調査）

4-4. シンポジウム配布資料（フォーラムの効果）

4-5. シンポジウム配布資料（フォーラムの社会実装）

4-6. シンポジウムに対するコメント

4-7. 業務計画書（平成24～26年度一部抜粋）

4-8. 平成24年度成果報告書（要約版）

4-9. 平成25年度成果概略

4-10. 日本原子力学会2015年春の年会 企画セッション提案書

4-11. 日本原子力学会2015年春の年会 講演要旨（土田氏）

4-12. 日本原子力学会2015年春の年会 講演要旨（竹中氏）

4-13. 日本原子力学会2015年春の年会 講演要旨（木村<sub>浩</sub>氏）

4-14. 平成26年度報告書目次案

4-15. 平成26年度報告書本文記述例

議題

1. 全体の振り返り
2. その他

※議論の詳細については、逐語録に記録されている。

## 1. 全体の振り返り（配布資料 4-2～4-15）

各種資料を用いて、今年度及び平成 24～26 年度の取り組みを振り返った。

### ①業務の進捗（配布資料 4-7～4-9、4-14、4-15）

木村<sub>浩</sub>氏より、資料 4-7 に基づき、平成 24～26 年度の業務内容の確認が行われた。

続いて、木村<sub>浩</sub>氏より、資料 4-14、4-15 に基づき、今年度の報告書の記述内容が紹介された。

### ②日本原子力学会 2015 年春の年会の発表内容（配布資料 4-10～4-13）

木村<sub>浩</sub>氏より、資料 4-10 に基づき、日本原子力学会 2015 年春の年会での発表内容が紹介された。

- ・ 3 月 20 日（金）16：20～17：50 に、企画セッションを行う。
- ・ 座長は諸葛氏。講演は 3 件で、1 件目は「福島事故後における市民と専門家の認識のギャップ（土田氏：代理発表神崎氏）」、2 件目は「『フォーラム』の試みと成果（竹中氏）」、3 件目は「コミュニケーション・システムとしての展望（木村<sub>浩</sub>氏）」。
- ・ 配布資料を用意する。

### ③シンポジウムで発表した内容について（配布資料 4-2～4-6）

資料 4-2～4-5 に基づき、木村<sub>浩</sub>氏、土田氏、竹中氏から、シンポジウムで発表した内容について紹介があった。この内容は、3 年度のプロジェクトの成果を包括したものであり、日本原子力学会 2015 年春の年会では、この内容を基に発表が行われる予定である。

また、木村<sub>浩</sub>氏より、資料 4-6 に基づき、シンポジウム終了時に参加者からいただいたコメントが紹介された。

特に土田氏の発表内容（意識調査の分析結果）と竹中氏の発表内容（フォーラムの会話・インタビューの分析結果）に整合性を持たせることが重視され、活発な議論がなされた。主な意見を以下に整理する。なお、参加者への意識調査から言える事柄は【意識調査】、フォーラム中の観察から推察される事柄は【観察】、インタビューから明らかになった事柄は【インタビュー】と示している。

- ・ 【意識調査】「原子力のことは専門家でなければわからない」という設問に対し、2013 年の原子力学会員参加者はフォーラム前後で肯定意見が減少しているのに対し、2014 年は肯定意見が増えている。  
→ 【観察】2013 年フォーラムでは、市民参加者で原子力について詳しい方や、よく理解する方がいたので、学会員参加者は、「一般市民でも原子力のことが分かる」と感

じたのかもしれない。2014年フォーラムでは、市民参加者の原子力を理解しようとする態度が比較的弱かったように思われる。

→【インタビュー】2013年の市民参加者は、自身に「原子力に積極的に関わろうとする」「専門家の考え方を理解する」という変容があったと述べている方がいた。それに対し、2014年の市民参加者からはそのような声はほとんど聞かれなかった（分からないことは専門家に任せればよい、という姿勢が強かったのだと思われる）。

→【意識調査・観察】2014年の市民参加者は、2013年参加者に比べ原子力への関心が低く、原子力について深く知ろうとしなかったのではないかと。

→【観察】2014年は、学会員参加者の中に、原子力利用を反対する方が1名いた。9名のうちの1名であるから、その影響は小さくはなかつたろう。

- ・ 第2期の市民参加者が「自分が変わってもよいと思う」とあまり思わなかった理由として、第2期の専門家参加者が自身の考えや主張、価値観、苦勞、悩みを伝えることがあまりなかった、ということは考えられないか。

→【インタビュー】第2期の市民参加者で、「グループワークの中で、専門家参加者が、『事故後、私も悩んでいる』と発言したのを聞いて、もっと専門家のことを理解しなければと思った」と述べている方がいる。ただし、その場に他の市民参加者もいたはずだが、第2期でそれに気づいたと述べた市民参加者は1名のみである。

⇒「専門家の考え、主張、価値観、苦勞、悩み」を聞くことは、変容の大きなきっかけにはなるが、全ての市民が変容するわけではない、と解釈すべきか。

- ・ 専門家が自身の価値観を正直に伝えることは、信頼につながることもあるが、逆に不信を招く（専門家が開き直ったと捉えられる）場合もあるのではないかと。例えば、原子力に対して強い不安を感じている市民に、専門家が「私は、原子力は安全だと思っています」と正直に伝えることは、必ずしもプラスにはたらくとは限らない。
- ・ 専門家には、市民がどのレベルの情報を求めているのか（結論がほしいのか、結論を自分で導くための判断材料がほしいのか、など）を聞き出す努力も求められるだろう。

- ・ 【インタビュー】市民参加者の専門家に対する不信度は、2013年のほうが強かったように思われる（市民を見下ろす、無責任などのイメージは、2013年インタビューでよく聞かれた）。

- ・ 【意識調査】2014年の事前意識調査では、「原子力の専門家」に対する信頼度（本調査Q3）は、信頼側3名、中間層4名、不信側2名と、やや信頼側に偏っている（インタビュー結果と整合する）。ただし、これは2014年1月調査の新規設問なので、2013年市民参加者の意見分布は分からない。

- ・ 2014年の市民参加者は、「専門家を信頼できる」「専門家に任せておけばよい」という

意識だったのか？ だとすれば、原子力ムラがあっても問題がない、という結論になるが。

→【インタビュー】不信が弱いだけで、信頼しているとは限らない。また、「専門家に任せておけばよい」と思っているかどうかは不明。

→【観察】2014年の市民参加者は、「ムラがあっても問題ない」というよりは、「専門家でなければ分からないこともあるので、ムラがあっても仕方がない」という意見の方が多く思われた。また、ムラの認知度は2014年参加者のほうが高かった(2014年参加者は、2013年フォーラムの記録を読むことができたため)。

- ・【観察】「お互いに理解し、尊重する」というステップに到達するまでの時間は、第1期、第2期で異なっていた可能性がある(「お互いに理解し、尊重する」が達成されたと考え、「宿題」を課すようにしたが、第1期の宿題は第4回、第2期の宿題は第3回であった)。

→【観察】2014年の市民参加者のほうが、専門家に対する不信感が弱かったため、「先入観の解消」「お互いに理解し、尊重する」に時間がかからなかった可能性がある。

- ・【意識調査】宿題の前後では、参加者の意識が大きく変化していた。

→【観察・インタビュー】宿題を通じ、深く自分の考えを整理し、また、他の参加者の考えを深く知ることができたためか。また、自分の考えに対し、他の参加者からコメントをもらったことも効果が大きかったのではないか。(ただし、「宿題」に関する一連の流れの、どの部分をもっとも効果的だったのかは分からない)

→【観察】テーマによっては、参加者ごとに知識量などが異なり、話についていけない方も出てくる。宿題を課したことで、参加者のスタートラインが揃い、議論が活発になったのではないか。

- ・フォーラムでの観察、フォーラム前後の意識調査、フォーラム後のインタビューによって、フォーラムで起こった現象についてはかなり分析が進んでいる。ただ、その現象が起こった理由は、明らかになっていない部分が多い。今回議論した理由は、仮説止まりではあるが、今後の検討につなげるべく、それぞれの現象ごとに整理しておくべきだ。

## 2. その他

木村<sub>浩</sub>氏から、プロジェクトメンバーへ謝意が伝えられた。

以上